

琵琶湖の淡水真珠は現在では生産量が低迷した状況にあります。その美しさや希少性から、めぐみ豊かな琵琶湖を象徴する地域資源であり、本県の淡水真珠産業を維持し、次世代にその技術を継承していく必要があります。

1. 真珠養殖業の特徴

琵琶湖における真珠養殖業は、1930(昭和5)年に琵琶湖固有種のイケチョウガイを利用した淡水真珠養殖が成功したことにはじまります。多くの人々の挑戦と努力の積み重ねによって、琵琶湖の淡水真珠は、国内はもとより海外でも良質の真珠として知られるようになりました。

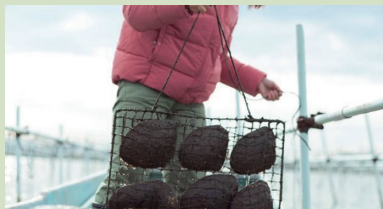


写真T-1
イケチョウガイ

琵琶湖水系固有の二枚貝で、殻の長さは最大30cmになります。



写真T-2 真珠養殖棚

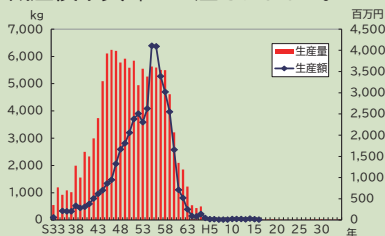


写真T-3 真珠母貝の飼育管理

2. 真珠養殖業の動向

(1)生産量・生産額

昭和40年代半ばには6000kgを超える生産量を誇り、1980(昭和55)年には生産額が40億円を超えて最盛期を迎えた真珠養殖業ですが、昭和50年代後半以降、母貝とするイケチョウガイの不足に加え、母貝の成長不良や原因不明の斃死が相次ぐようになり、中国産真珠の市場参入が追い打ちをかけて、急激に衰退しました。1989(平成元)年には生産額が1億円を割り込み、ここ10年間は、生産量でおおよそ10kgから40kgで推移しています。2021(令和3)年には15kgの琵琶湖産淡水真珠が生産されました。



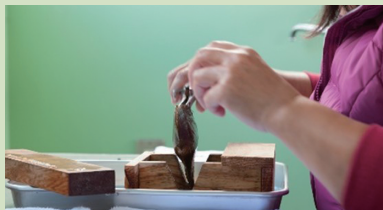
図T-1 真珠養殖生産量と生産額の推移
(滋賀農政事務所「滋賀農林水産統計年報」、
農林水産省「漁業・養殖業生産統計」より)

(2)現状と課題

琵琶湖における真珠養殖業の低迷の最も大きな要因は、真珠母貝となるイケチョウガイが成長しなくなったことにあります。真珠母貝の成長不振については、水草の異常繁茂による餌料不足など様々な要因が考えられましたが、未だその詳細はよく判っていません。

このため、県と関係者の連携のも

と、異常繁茂した水草の刈り取りによる漁場保全対策や、現状の環境下でも成長できる優良な真珠母貝の確保に向けた研究がなされてきました。現在でも、真珠母貝生産の省力化に向けた研究が実施されており、真珠生産の再興に向けた努力が続けられています。こうした関係者の努力の甲斐もあり、近年では西の湖や堅田内湖、赤野井湾などの漁場において真珠母貝の成長に回復の兆しが見えてきています。また、良質な真珠を作るためには、漁場環境の保全や体制整備の努力もさることながら、匠の技とも言える真珠の施術(ピースや核を真珠母貝に埋め込む作業)に熟練した技術者の確保と育成も欠かすことができない重要な課題となっています。



写真T-4 真珠の施術

こうした背景の中、2016(平成28)年6月に「真珠の振興に関する法律」が制定されたことを受け、琵琶湖の真珠産業が抱える諸課題に取り組むため、滋賀県淡水真珠振興計画を2018(平成30)年3月に策定しました(2022(令和4)年3月改定)。

3. 琵琶湖産淡水真珠の特徴

琵琶湖の真珠養殖業は、3年ほど育てた殻長(貝殻の長さ)10～13cmの大きさのイケチョウガイを真珠母貝として使用します。この真珠母貝に施術し、さらに漁場で3年間育てると、母貝の力で幾重にも真珠層が巻かれた淡水真珠が出来上がります。一般に知られる海産の真珠が比較的短期間でつくられるのに対し、琵琶湖の淡水真珠は長い時間をかけて真珠層を巻きます。できあがった真珠は、白色や淡いピンク色、オレンジ色など様々な色彩になります。また、その形は球体に近いものからバロック型と呼ばれるものまで様々あり、世界に一つしかない輝きを放ちます。



写真T-5 琵琶湖産淡水真珠

【ピース】真珠母貝とは別のイケチョウガイから採取した外套膜の小片。出来上がった真珠の巻きや照り、色に大きく影響することが知られている。

水産課